

・白選五十一首・



■ 時田則雄 ■

ときた・のりお 1946年、北海道生まれ。畑作農業経営。帯広農業高校在学中に作歌開始。野原水嶺に師事する。現在、「辛夷」編集発行人。歌集に「北方論」「緑野疾走」「凍土漂泊」「十勝劇場」「夢のつづき」「ベルシュロン」などがある。エッセイ集に「北の家族」。第7歌集の準備中である。

獣医師のおまへと語る北方論樹はいつぽんでなければならぬ

瘡蓋かさぶたのごとく凍土に生きながらわれはたつとぶモハメッド・アリ

土地を買ふは罪かもしれないぬ風吹けばエゾノギシギシ種子ふりこぼす

牛糞のこびりつきたるてのひらを洗へば北を指す生命線

野男の名刺すなはち凧と氷雨にさらせてのひらの皮

汗のシャツ枝に吊してかへりきしわれにふたりの子がぶらさがる

トレーラーに千個の南瓜と妻を積み霧に濡れつつ野をもどりきぬ

離農せしおまへの家をくべながら冬越す窓に花咲かせをり

生えてゐるやうにゆふべの野良に立つ父の前世あるひは樹木

敗北はあるひは罪かブラキストン・ラインこえきし祖父を超すべし

嫁して祖母七十五年ひともの樹にたとふれば両手にあまる

「北方論」

午後九時、いま私は札幌での講演を終えて帰って来たところだ。この稿を書き終わったら、明日の町内総会の会計報告書を作らなければならぬ。総会後は、忘年会。次の日も別の忘年会。年内に「辛夷こがし」の一年間の原稿執筆者のリスト作り。新聞、雑誌の選歌。エッセイ四本と歌集の跋文執筆。農協へ行つて、今年の営農のケジメもつけなければならぬ。今朝、札幌へ向かう前に、「忙しい」を連発する私に妻がいった。「半農半歌の人生でしょう」。

私は四十六歳の時に、「辛夷」の編集発行人に就任した。その翌年、妻が突然難病に罹り、農作業はおろか、家事もほとんどできなくなってしまった。以来、六年ほどの間、私

〈われ〉〈われら〉いづれにしても雪はらのゆきのひかりに佇てば微塵よ

水面に刺さる一瞬水ならず輪をひらきつつ走る雨脚

火を囲みわれらともがら酒を酌む眼に一点のほのほを映し

てのひらの胼胝黒ずみて盛りあがり今年の秋のふかまりを知る

凍日に透かせばこの軀たつぷりと毒を含める植物に似る

この山のむかう側にも男ゐて樹を伐る音の谷にひびかふ

釘あまた打ち込まれたる柱焼べ妻は夕餉の菜を茹でてをり

綱引きの男の体軀ぎんぎんに膨れてやがてどつと崩れつ

樹齡わがよはひとおなじ椴松の枝をたはめて朝を輝く

びろびろのびろらのぶらのびろぶらにびろららぶらららぶらら

こと牛におよべば大きく拳ふり草地哲学語れる男

ハイエナも子の親なれば新しきいのちのために屍肉食る

月光にひかるピストン・シリンダー犬は臍を絞りて吠える

排気ガス霞のそらへ噴きあげて火山灰地を巴投げする

塩辛き体をシャワーに浴びせをり労働とふはをはれば重し

まだ吠いてゐるぞ連翹いますこし狂つてゐたい人生である

きりきりの寒気に枝を張る椴の力の底へそそぐ月光

十勝川泡立ち海に刺さりゆくああ男心よ狂つてしまへ

十勝野になにを遺さむ畑否 歌の片片 骨の片片

堆肥撒き終へしゆふぐれ存分に酒を喰らひて朦朧となる

〔緑野疾走〕

〔凍土漂泊〕

〔十勝劇場〕

はたった一人で農作業をこなした。機械化が進んだとはいっても、農業は家族の力が必要である。したがって、十勝の基幹作物である豆とビートの栽培も、わが農協の特産品であるナガイモの栽培もやめ、手間のかからない濃粉加工用の馬鈴薯と小麦の二品目を栽培した。その結果、収入が激減し、所得税をほとんど払わない百姓に転落してしまった。

そのころ、二人の娘は東京遊学中だった。冬休みに帰省した長女に、「○○食品会社が工場を建てたいので家の前の土地を売ってくれないかってよ」といったら、「そんなの出来たら日高山脈が見えなくなる」といった。春休みに帰省した時には、「うちの畑の続きの畑十町歩（三万坪）が売りに出たぞ。買うか」と聞いたら、「いらぬ」と答えた。その時、私は娘が百姓にならないのだと確信した。しかし、長女は大学を卒業と同時に彼氏を連れて帰り、そして結婚して百姓になった。それから三年、経営は軌道に乗り、再び地域の高額納税者の仲間入りをした。

今朝、妻がいつていた「半農半歌の人生」について、〈スーパードカチ〉のなかで、行きも帰りも考えてみた。面白い言葉ではあるが、違う。私は農業にも歌にも力を入れて生きていくのだ。忙しすぎるが、私の人生は専農専歌の人生なのである。

国際化せし東京の胃袋に届けむ露に濡れしアスバラ

トラクターに軽油マンタン胃袋に焼酎一合 今日を奪はむ

山の裏みてきたりけり山の裏雪しんしんと降りあたりけり

ロッキングチェアに凭れて妻がいふ 今日の空 ほら 水浅葱色

「夢のつづき」

蹠にうれしかりけり春の土命あづけてゐると気づきぬ

歌人とはそも何者ぞ春の土を七五調にて歩むでもなし

傾いてゐる木 春の木 花咲く木 一生ひとよかたむく木であるもよし

炎天に咲ける鬼罌粟 白骨となるまでの距離ふと測りたり

コンバイン轟く八月十五日平和は麦の香のなかにある

息吸へばホーとかすかに音がする男は笛になることがある

病む妻と雲のかたちを眺めをり奔馬ほぐれて青に溶けゆく

ペルシユロン その底力くれ給へ空の青さに酔つてはをれぬ

「ペルシユロン」

洗濯機の泡に溺れて手袋が助け求めてゐる昼下がりに

この腐臭はどこからくるか人間か東京の朝グヂグヂ明ける

百姓になるといふ娘に言つておくことあるいつも空青ならず

身土不二俺はここから動かない動くはずなし雪よふれ降れ

酒を喰らひハンドル握る トラクターよろけず走れ 月の夜だよ

良寛がひよいと心に現れてつまらぬことはやめよと言ひぬ

一年は三百六十五日といふけれど俺は三千世界を駆けた